

科学研究費助成事業 研究成果報告書

平成 27 年 6 月 17 日現在

機関番号：12613

研究種目：基盤研究(A)

研究期間：2010～2014

課題番号：22242018

研究課題名(和文)「日韓相互認識」研究の深化のために

研究課題名(英文)For growing a study of Japan-Korea mutual recognition

研究代表者

吉田 裕 (Yoshida, Yutaka)

一橋大学・社会学研究科・教授

研究者番号：20166979

交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 28,900,000円

研究成果の概要(和文)：本研究は、東アジア世界の中の日本・朝鮮の関係に焦点をあわせながら、日本の側の対朝鮮認識がいかにして形成されたのかという問題を、朝鮮の側の対日本認識の形成と関連させながら、具体的に明らかにしようとするものである。こうした研究を、日本の研究機関に属する研究者によって究明するだけでなく、ソウル大学校を中心とする韓国の歴史研究者との研究交流(共同研究や共同史跡踏査及び日韓歴史共同研究シンポジウム、等)を通じて行ってきた。

研究成果の概要(英文)：The purpose of this study is intended to make clear concretely the problem that how the recognition toward Korea in the Japanese side formed while connecting to the recognition toward Japan in the Korean side with focusing on the relations between Japan and Korea in the East Asian world. We have conducted this kind of research through not only investigations by researchers who belongs to research institutions in Japan, but also research exchanges (joint research, joint exploration on the historic sites and Japan-Korea historical joint research symposium etc.) with historical researchers in Korea, mainly in Seoul National University.

研究分野：日本近現代政治史、日本近現代軍事史

キーワード：日本史 東洋史 交流史 学術交流 相互認識

1. 研究開始当初の背景

近年、「歴史認識」の問題が、東アジアにおける国際関係を不安定化させる重要な要因として、大きな注目を集めるようになってきている。この問題は、各々の国民国家が国民的統合の基盤としている「記憶の共同体」相互の相克や摩擦という側面を有しているだけに、問題の処理を誤るならば、深刻な政治問題に発展する可能性を常にはらんでいる。こうした状況の中であって、今、歴史学に求められているのは、この「記憶の共同体」をいかに歴史的に相対化するかという学問的試みである。すなわち、様々な記憶相互間のせめぎあいと国家や社会諸集団による関与の過程をへて、「記憶の共同体」がいかに形成されるのかを、具体的に明らかにすることである。その際、重視する必要があるのは、他者認識の問題である。日本の場合「記憶の共同体」の核をなすのは、歴史、文化、伝統を共有するとされる「日本人」としての同胞意識だが、この日本人としてのアイデンティティは、他者認識と密接不可分の関係にある。本研究の目的は、歴史認識問題が東アジアにおける国際情勢を不安定化させている現状の下で、各々の国民国家の基盤にある「記憶の共同体」を歴史的に相対化することである。そのために、「記憶の共同体」の形成過程において、日本人としてのアイデンティティと不可分の関係にある他者認識がいかにして形成されたのかという問題を明らかにしたい。具体的には、日本人の対朝鮮認識の形成過程を、朝鮮側の対日本認識の形成過程とも関連させながら、歴史的に解明することが本研究の目的である。以上の研究目的を達成するため、十年余にわたる共同研究を積み重ねてきたが、その過程で、韓国側のメンバーも含めて、次のような認識を我々は共有するに至った。

第一は、「植民地的近代」という分析枠組の重要性である。宮嶋博史他編『植民地近代の視座 朝鮮と日本』(岩波書店、2004年)が指摘しているように、それは双方の側の民族主義を相対化しつつ、植民地期と解放後を「近代」という視点から連続したものとしてとらえる分析枠組であり、同時に植民地期における権力作用が解放後の韓国の人々の意識や日常生活をいかに規定しているのかを問うものでもある。「植民地的近代」という枠組は、「記憶の共同体」を分析する際にも重要な意味を持つ。日本と韓国の歴史教科書を例にとるならば、歴史認識の問題では大きく対立する面があるとはいえ、自国史と世界史の二本立てで歴史教育を行うという点では、両者の間には強い類似性が認められるからである(中村哲編『東アジアの歴史教科書はどう書かれているか』日本評論社、2004年)。このことは、植民地時代の歴史教育の枠組が、解放後の韓国の歴史教育を大きく規定していることを意味している。

第二は、書物を史料として活用することで

ある。従来の日本史研究では、手書きの文書史料は重視されてきたが、書物は複製物であるとしてその史料価値を認めてこなかった。しかし、1990年代以降認識が大きく変わり、書物を史料として歴史を叙述する新しい研究動向が出てきている(分担者の若尾政希の研究)。近世の日朝関係にきわめて重要な役割を果たした対馬藩の蔵書(対馬歴史民俗資料館所蔵)や植民地期につくられた京城帝国大学の蔵書(ソウル大学図書館所蔵)等、日朝関係と関わって蓄積された書物に光を当て、その分析を通じて、日韓両国の相互認識の問題をさらに掘り下げて解明することが期待できる。

第三には、史跡やそれらを中心にして行われる各種のセレモニーが、歴史的な記憶の形成に及ぼす影響力の大きさである。すでに、歴史認識と史跡の関係については、羽賀祥二『史跡論』(名古屋大学出版会、1998年)などの優れた先行研究があり、これらにより本共同研究の重要性を再認識させられた。また、共同調査の結果、遺跡の保存は観光資源化の動きとも関連している場合が多く、そのことが記憶の形成に微妙な影響を及ぼしていることも確認できた。今後は、植民地期に朝鮮総督府によって実施された史跡指定事業にまで視野をひろげて研究を行いたい。なお、韓国との共同調査の成果の一端は、都珍淳「世紀の忘却を超えて 日露戦争100周年記念行事と記念物を中心に」(『年報日本現代史13』現代史料出版、2008年)に示されている。

2. 研究の目的

本研究は、東アジア世界の中の日本・朝鮮の関係に焦点をあわせながら、日本の側の対朝鮮認識がどのようにして歴史的に形成されたのかという問題を、朝鮮の側の対日本認識の形成と関連させながら、歴史具体的に明らかにしようとしたものである。こういった相互の対外認識の歴史的な形成を解明しようとする研究を「日韓相互認識」研究と呼び、これを、日本の研究機関に属する研究者によって究明し議論するだけではなく、ソウル大学校を中心とする韓国の歴史研究者との研究交流(共同研究や共同での遺跡踏査、シンポジウム、等)を通じて行おうとした。なぜなら、こういった研究交流の地道な積み重ねが、真の意味での、未来にむけての「日韓相互認識」につながることを期待できるからである。

上述の研究目的を達成するために、具体的に ~ の6つの研究の柱を設定し、集中的に研究を行った。

植民地における近代学校教育の実態とその歴史的意義を、具体的に解明する。朝鮮に設立された京城帝国大学には、東京帝国大学等から多数の日本人教師が送り込まれている。そこで形成された教育・研究システムが、朝鮮人工リート層を媒介にして、解放後の韓国の学校教育にどのような形で継承された

か、また、それが学校教育のありかたをどのように規定したのか、という問題を具体的に明らかにしようとした。なお高等教育だけでなく、植民地期における公立普通学校の普及状況を明らかにし、それが解放後の教育に与えた影響についても考察を行った。

豊臣秀吉の朝鮮侵略（壬辰・丁酉の倭乱）をめぐる歴史的記憶の問題についての研究を行った。これについては、敗戦・解放後の日韓両国の歴史教科書におけるこの事件の取り上げ方の歴史的変遷まで、研究対象を拡大して研究に取り組んだ。

宗家を通じてみた前近代日朝関係の歴史の変遷に関する研究を進展させる。一つには、宗家の蔵書目録や蔵書を史料として、対馬藩にどのような蔵書が蓄積されたかを解明し、日本側の対朝鮮認識の特質を明らかにする。二つには、朝鮮王朝後期における日朝外交・日朝貿易の朝鮮側の窓口であった東萊府に関する研究に本格的に取り組んだ。

日本との結びつきが強かった対馬及び朝鮮半島南岸の日朝関係に関連する史跡の共同調査を行った。特に植民地期において史跡として認定された遺跡を日韓合同で調査を行った。その際、解放後に、これらの史跡がどのように扱われたのかという問題にも注目した。

朝鮮人社会と日本人社会をつなぐ媒介者の役割に注目した。具体的には、近代日本の動向に対して賛否あざなえる対応を示した朝鮮の言論人、渡日朝鮮人留学生、在日朝鮮人と、「韓国併合」に伴い新たに創設された朝鮮王公族・朝鮮貴族がそれである。本共同研究の中で、すでに何人かの研究者がこの問題の研究に取り組み始めており、その成果をさらに発展させた。

日本は朝鮮を植民地として支配するのに当たって、朝鮮を「文明化」し、「開発」する使命があるとして、正当化を図った。そのような「文明化」のイデオロギーの具体的な諸相を明らかにするとともに、そのような支配正当化論が第二次世界大戦後の日本における対朝鮮認識に大きな影響を及ぼしたことについても、対韓外交、日韓会談などに焦点をあわせながら、分析を行おうとした。

このように、本研究は、「植民地的近代」という分析枠組を設け、「書物」、「史跡」などの重要性に着目した史料論の進展といった研究動向を積極的に取り入れている点に新しさがある。だが、何よりも重要なのは、毎年実施してきたシンポジウムと共同調査を通じて、プロジェクトに参加している日韓両国の研究者の間で、いま「日韓（韓日）相互認識」研究が必要だという問題意識が共有されてきていることである。このことが、本研究の最大の強みであり、メリットであるといえよう。

3. 研究の方法

(1) 「日韓相互認識」研究を深化させるために、次の5つの研究項目班を設定して、班

ごとで個別事例研究を深める。

A班：近代学校教育の実態と歴史的意義 班長 木村元

歴史教育の問題を中心に植民地における近代学校教育の実態とその持った歴史的意義を、ソウル大学校の金基奭教授（韓国近代教育史）の研究グループと緊密に連携しつつ具体的に解明する。

朝鮮に設立された京城帝国大学には、東京帝国大学等から多数の日本人教師が送り込まれている。そこで形成された教育・研究システムが、朝鮮人エリート層を媒介にして、解放後の韓国の学校教育にどのような形で継承されたか、また、それが学校教育のありかたをどのように規定したのか、という問題を具体的に明らかにしたい。

高等教育だけでなく、植民地期における朝鮮人初・中等教育の普及状況を明らかにし、それが解放後の教育に与えた影響についても考察を行う。

B班：豊臣秀吉の朝鮮侵略をめぐる歴史的記憶 班長 若尾政希

近世日本において、豊臣秀吉の「朝鮮出兵」がどのように伝承され、その歴史的記憶がどのような形態・内容のものとして形成されたのかを分析した。歴史書だけでなく、軍記物・講談や民間伝承等も分析した。

朝鮮王朝後期において、壬辰・丁酉倭乱がどのように伝承され、その歴史的記憶がどのような形態・内容のものとして形成されたのかを分析した。王朝の記録だけでなく、文集類、『壬辰録』などの野史、民間伝承等も分析した。

上記の歴史的記憶が、近代における日朝の相互認識をどう規定し、どのように影響したかも検討する。たとえば、参謀本部『日本戦史・朝鮮の役』の果たした役割をも考察した。

敗戦・解放後の日韓両国の歴史教科書におけるこの事件の取り上げ方の歴史的変遷まで、研究対象を拡大して研究に取り組んでいる。

C班：前近代・近現代日朝関係 班長 池享

宗家からみえる前近代日朝関係の歴史の変遷に関する研究を進展させる。

宗家の蔵書目録（対馬歴史民俗資料館）に基づき日朝関係に関わって蓄積された蔵書を分析することによって、日本側の対朝鮮認識の特質を具体的に明らかにした。

朝鮮王朝後期における日朝外交・日朝貿易の朝鮮側の窓口であった東萊府に関する研究に本格的に取り組んだ。

日朝修好条規締結以後、変容する日朝関係の中で新たに生じた外交的摩擦、すなわち関税問題・漁業問題・居留地問題などについて、日朝双方の外交史料に基づいて実態研究を進めている。

現代における日朝関係の歴史的位置を、未来を展望しながら検討した。

D班：朝鮮人社会と日本人社会をつなぐ媒介者の役割 班長 糟谷憲一

朝鮮人社会と日本人社会をつなぐ媒介者の役割を果たしていると考えられる人々の存在に着目した。具体的には、まず、言論人、渡日朝鮮人留学生、在日朝鮮人に着目し、『独立新聞』『皇城新聞』『大韓毎日申報』などの新聞や愛国啓蒙団体・留学生団体の機関誌に表れた日本観、日本認識を再検討し、その役割と歴史的意義を検討した。

同時に、「韓国併合」に伴い新たに創設された朝鮮王公族・朝鮮貴族に着目し、その役割と歴史的意義を検討している。

E班：日本の植民地支配期における「知」のあり方 班長 田崎直義

日本は朝鮮を植民地として支配するのに当たって、朝鮮を「文明化」し、「開発」する使命があるとして、正当化を図った。そのような「文明化」のイデオロギーの具体的な諸相を明らかにするとともに、そのような支配正当化論が第二次世界大戦後の日本における対朝鮮認識に大きな影響を及ぼしたことについても分析した。

以上のようなイデオロギー的特徴をもった日本の支配下において、朝鮮人の知的文化的営みがどのような特徴をもって展開したのか、それは日本の支配政策とはどのように相互規定的な関係にあったのか、また、そのことは第二次世界大戦後における朝鮮の対日本認識にどのような影響を及ぼしたのかについても分析した。

(2) 国内の研究者を組織して「日韓相互認識」研究会を開催した。個別の研究報告・討論に加え、研究項目班の成果報告も行った。

(3) ソウル大学校を中心とする韓国側の歴史研究者と「日韓歴史共同研究シンポジウム」を年1回開催し、あわせて日韓関係に関わる史跡の共同調査を行った。

(4) シンポジウム及び共同調査の成果集を印刷した。また研究会誌『日韓相互認識』を刊行し、一橋大学機関リポジトリを通して全世界に発信した。

4. 研究成果

(1) 日韓両国関係が「歴史認識」問題をめぐって対立し不安定化する状況のなかで、本研究が、両国の研究者間の相互交流のネットワークの形成におおいに寄与してきたことを、本研究の最大の成果として意義づけたい。本研究の研究期間に4回(第13~16回)のシンポジウムと共同史跡踏査を行ってきたが、そうした活動を通して、なによりも、お互いへの信頼感を醸成するとともに、「日韓(韓日)相互認識」研究をいかに深化されるかという問題意識を共有することができた。この点を第一の成果として指摘しておきたい。

(2) A~Eの5つの研究項目班がそれぞれの計画に応じて資料収集と調査を行い、研究成果を挙げることができた。例を挙げれば、A班がUCLA(アメリカ・ロサンゼルス)のクレスト研究所で「日本と朝鮮半島の教育」についての史料調査と研究の打合せを行

った。また、B班が長崎県対馬の対馬歴史民俗資料館と韓国の国史編纂委員会で、宗家関係の史料調査を行った。

(3) 5つの研究項目班の研究成果を持ち寄って、研究分担者と研究協力者が集う「日韓相互認識」研究会・会議を7回開催した。開催日及び報告者は次の通りである(会場は、一橋大学マージョリータワー3601室)

第16回研究会(平成22(2010)年8月1日) 裴始美「1920年代における朝鮮総督府の留学生政策」、中村政則「『坂の上の雲』と司馬史観の誕生」/第17回研究会(平成23(2011)年1月9日) 尹明淑「軍隊慰安所制度をめぐる諸論争と課題」/第18回研究会(平成23(2011)年7月31日) 李成市氏「新羅中城里碑について」、池享氏「災害史と歴史学」、若尾政希「天変地異の思想」/第19回研究会(平成24(2012)年7月25日) 糟谷憲一「20世紀初頭の朝鮮における権力構造に関する考察」、吉田裕・ペヨンミ・野木香里「特攻隊に関する一考察 朝鮮人兵士の問題を中心に」/第20回研究会(平成25(2013)年1月13日) 南相九(東北アジア歴史財団)「独島竹島・歴史問題から日韓関係を考える」/第21回研究会(平成25(2013)年7月15日) 佐藤宏之・小関悠一郎「大名評判記にみる近世日本の大名像 東アジア近世論をめぐって」、三ツ井崇「朝鮮総督府時局対策調査会(1938年)会議にみる「内鮮一体」問題 第一分科会を中心に」、杉岳志「目録にみる東京高等商業学校の蔵書の特徴」/第22回研究会(平成26(2014)年1月12日) 加藤圭木「清津港の「開発」と朝鮮東北部社会 日露戦争から1920年代まで」

(4) 本研究の総括と、韓国の日本史・朝鮮史研究者(ソウル大学校を中心とする研究者)との研究交流のために、年に1回、日韓歴史共同研究シンポジウム及び日韓関連史跡の共同踏査を行った。

<平成22年度>8月18日から20日までの3日間、一橋大学佐野書院をメイン会場に日韓歴史共同研究プロジェクト第13回シンポジウムを開催し、日本側2本、韓国側3本の報告を用意した。日本側は、「日韓相互認識」研究会の議論を基に、中村政則、裴始美が報告した。また、埼玉県をフィールドにして共同史跡踏査を行い、戦争関係史跡・博物館等を訪問した。

<平成23年度>8月18日から20日までの3日間、韓国・木浦大学をメイン会場に、第14回シンポジウムを開催した。報告は日本側3本、韓国側2本であった。日本側は、李成市、池享、若尾政希が報告した。この年は通常のテーマに加え、地震・災害をテーマとした報告を2本準備し熱心に議論することができた。また、木浦周辺の戦争関連史跡の共同踏査を行った。

<平成24年度>8月19日から22日までの4日間、鹿児島で、第15回シンポジウムを開催し、日本側2本、韓国側3本の報告を用意した。日本側は、糟谷憲一、吉田裕・ペヨンミ・

野木香里（共同報告）が報告した。また、鹿児島県をフィールドにして共同史跡踏査を行い、戦争関係史跡・博物館等を訪問した。<平成25年度>8月19日から21日までの3日間、韓国江原道春川の翰林大学校にて、第16回シンポジウムを開催した。報告は日本側3本、韓国側2本であった。日本側は、佐藤宏之・小関悠一郎（共同報告）、三ツ井崇、杉岳志が報告した。江原道をフィールドとして共同史跡踏査を行った。

（5）前掲の日シンポジウムの成果集（報告と討論）を編集・印刷し、各所に配布した。本研究の期間内に発刊したのは、次の3冊である。

『日韓歴史共同研究プロジェクト第12回シンポジウム報告書』『日韓相互認識』研究会、126頁、2012年3月

『日韓歴史共同研究プロジェクト第13回・第14回シンポジウム報告書』『日韓相互認識』研究会、161頁、2013年3月

『日韓歴史共同研究プロジェクト第15回・第16回シンポジウム報告書』『日韓相互認識』研究会、229頁、2014年3月

（6）本研究会雑誌『日韓相互認識研究』を3号編集・印刷し、各所に配布するとともに、一橋大学機関リポジトリにて一般公開した。各語収載の論考は次の通りである。

『日韓相互認識』第3号、98頁、2010年4月

酒井裕美「総理交渉通称事務衙門の構成員分析」、裴始美「1920年代における在日朝鮮人留学生の統計分析」、糟谷憲一「日本における朝鮮近代史研究の成果と課題」

『日韓相互認識』第4号、131頁、2011年3月

裴始美「朝鮮総督齋藤実と阿部充家による朝鮮人留学生「支援」」、李宣定「1982年の教科書問題に関する政治史的考察」、呉永鎬「韓国における学生スポーツ選手の人権問題」、若尾政希「日本近世における儒教の位置」、瀬畑源「【資料紹介】宮内庁所蔵・昭和天皇の東京大空襲戦災地行幸史料」、「韓国入遺族との出会いから100年を考える証言集会」の記録」（秋岡あや・加藤圭木）

『日韓相互認識』第5号、151頁、2012年2月

小川和也「天和度朝鮮通信使と大老・堀田正俊の「筆談唱和」」、権容爽「韓流の進化/深化と日韓関係」、半澤健市「関東大震災とリスボン大地震」、三ツ井崇「【研究ノート】朴勝彬の言語観とその背景・補論

5. 主な発表論文等

〔雑誌論文〕(計80件)

吉田裕、近現代史への招待、大津透、桜井英治、藤井讓治、吉田裕、李成市編、岩波講座日本歴史15（図書所収論文）（岩波書店）査読無、3-22、2014

李成市、六八世紀の東アジアと東アジア世界、大津透、桜井英治、藤井讓治、吉田裕、李成市編、岩波講座日本歴史2

（図書所収論文）（岩波書店）、査読無、211-250、2014

高柳友彦、近現代日本における「資源」利用・管理の歴史研究 - 経済史研究を中心に、歴史学研究、893号、査読無、57-63、2012

李成市、日本歴史学界の東アジア世界論に対する再検討—韓国学界との対話から（韓国文）、歴史学報（ソウル）、216号、査読有、57-80、2012

若尾政希、天変地異の思想、図書、758号、査読無、13-19、2012

木村直也、東アジアのなかの征韓論、荒野泰典、村井章介、石井正敏編、日本の対外関係7 近代化する日本（図書所収論文）（吉川弘文館）査読無、332-341、2012

山口公一、『新書太閤記』にはなぜ朝鮮侵略が描かれなかったのか、追手門学院大学アジア学科編、秀吉伝説序説と『天正軍記』（図書所収論文）（和泉書院）査読無、26-50、2012

糟谷憲一、日本と朝鮮の歴史認識、一橋大学東アジア政策研究プロジェクト編、東アジアの未来（図書所収論文）（東洋経済新報社）査読無、215-243、2012

糟谷憲一、「韓国併合」—〇〇年と朝鮮近代史、朝鮮学報、219輯、査読無、1-38、2011

三ツ井崇、戦後日本における朝鮮史学の開始と史学史像 1950~60年代を中心に 朝鮮語、韓国史研究（韓国史研究会）、153号、査読有、349-369、2011

林雄介、光州事件を知るために、歴史評論、738号、査読無、54-67、2011

若尾政希、近世日本の思想史的位置、趙景達、須田努編、比較史的にみた近世日本（図書所収論文）（東京堂出版）査読無、122-139、2011

池享、豊臣秀吉像の創出、『室町戦国期の社会構造』（図書所収論文）（吉川弘文館）査読無、310-334、2010

林雄介、1910年前後の朝鮮 - 大韓帝国はなすすべもなく併合されてしまったのか、歴史評論、725号、査読無、4-15、2010〔学会発表〕(計51件)

山口公一、戦時期朝鮮における神社研究の諸論点、「日中戦争・アジア太平洋戦争期朝鮮社会の諸相」共同研究班、2014年3月8日、京都大学人文科学研究所（京都府京都市）

三ツ井崇、揺らく「内鮮一体」像—日中戦争期朝鮮「皇民化」政策と知識人—、中国現代史研究会シンポジウム「東アジアにおける日中戦争」（招待講演）2013年3月16日、金山プラザホテル（愛知県名古屋）

糟谷憲一、世界史教科書のなかの朝鮮史叙述、日本歴史学協会歴史教育シンポジウム「現代への視点と世界史像の再構築」

(招待講演) 2012年10月20日、学習院大学(東京都豊島区)
森武麿、満州移民の記憶と日中相互認識、東アジア歴史フォーラム、2011年11月11日、北京大学、北京(中国)
〔図書〕(計36件)
吉田裕、現代歴史学と軍事史研究、校倉書房、366頁、2012
池享、動乱の東国史7東国の戦国争乱と織豊権力、吉川弘文館、318頁、2012
小関悠一郎、明君の近世 学問・知識と藩政改革、吉川弘文館、318頁、2012
吉田裕、兵士たちの戦後史、岩波書店、299頁、2011
三ツ井崇、朝鮮植民地支配と言語、明石書店、404頁、2010
クォン・ヨンスク、「韓流」と「日流」-文化から読み解く日韓新時代、NHK出版、272頁、2010
〔その他〕
ホームページ等
「日韓相互認識」研究会コミュニティ・ホームページ
<https://hermes-ir.lib.hit-u.ac.jp/rs/handle/10086/17439>
6. 研究組織
(1)研究代表者
吉田裕 (Yoshida Yutaka)
一橋大学・大学院社会学研究科・教授
研究者番号: 20166979
(2)研究分担者
糟谷憲一 (Kasuya Kenichi)
一橋大学・大学院社会学研究科・特任教授
研究者番号: 80143345
池享 (Ike Susumu)
一橋大学・大学院経済学研究科・教授
研究者番号: 20134885
木村元 (Kimura Hajime)
一橋大学・大学院社会学研究科・教授
研究者番号: 60225050
三ツ井崇 (Mitsui Takashi)
東京大学・大学院総合文化研究科・准教授
研究者番号: 60425080
山口公一 (Yamaguchi Koichi)
追手門学院大学・国際教養学部・准教授
研究者番号: 20447585
若尾政希 (Wakao Masaki)
一橋大学・大学院社会学研究科・教授
研究者番号: 80210855
山内民博 (Yamauchi Tamihiro)
新潟大学・人文社会・教育科学系・准教授
研究者番号: 40263991
木村直也 (Kimura Naoya)
産業能率大学・経営学部・教授
研究者番号: 50192018

辻弘範 (Tsuji Nobuhiro)
北海学園大学・経済学部・准教授
研究者番号: 20348494
クォン・ヨンソク (kwon Yonsuku)
一橋大学・大学院法学研究科・准教授
研究者番号: 80361848
酒井裕美 (Sakai Hiromi)
大阪大学・大学院言語文化研究科・准教授
研究者番号: 80547563
林雄介 (Hayashi Yusuke)
明星大学・人文学部・教授
研究者番号: 00286246
森武麿 (Mori Takemaro)
神奈川大学・法学部・教授
研究者番号: 20095756
田崎宣義 (Tasaki Nobuyoshi)
一橋大学・名誉教授
研究者番号: 40107157
中村政則 (Nakamura Masanori)
一橋大学・名誉教授
研究者番号: 30017529
(平成24年度より研究協力者)
李成市 (Lee Sung-Si)
早稲田大学・文学学術院・教授
研究者番号: 30242374
渡辺治 (Watanabe Osamu)
一橋大学・名誉教授
研究者番号: 70013026
加藤哲郎 (Kato Tetsuro)
一橋大学・名誉教授
研究者番号: 30115547
並木真人 (Namiki Masato)
フェリス学院大学・国際交流学部・教授
研究者番号: 00208076
高柳友彦 (Takayanagi Tomohiko)
一橋大学・大学院経済学研究科・講師
研究者番号: 80588442
小川和也 (Ogawa Kazunari)
北海道教育大学・教育学部・准教授
研究者番号: 90509035
小関悠一郎 (Koseki Yuichiro)
千葉大学・教育学部・准教授
研究者番号: 20636071
佐藤宏之 (Sato Hiroyuki)
鹿児島大学・教育学部・准教授
研究者番号: 50599339
中北浩爾 (Nakakita Koji)
一橋大学・大学院社会学研究科・教授
研究者番号: 30272412
石居人也 (Ishii Hitonari)
一橋大学・大学院社会学研究科・准教授
研究者番号: 20635776